

ヒズブッラーのレジスタンス思想：ハサン・ナスルッラー「勝利演説」

訳・注解 末近 浩太*

本訳出は、レバノンのヒズブッラー (Ḥizb Allāh) の書記長ハサン・ナスルッラー (Ḥasan Naṣr Allāh, 1960-)が、2006年9月22日にベイルート南部郊外で行った「勝利演説 (Khitāb al-Intiṣār)」の全訳である。

I. 「歴史的演説」としての「勝利演説」

2006年7月12日、ヒズブッラーの軍事部門「イスラミック・レジスタンス (Islamic Resistance in Lebanon; al-Muqāwama al-Islāmīya fī Lubnān)」は、レバノン南部のイスラエルとの国境地帯においてイスラエル軍施設を急襲、兵士2名を拘束した(「確かな約束 (al-Wa'd al-Ṣādiq)」作戦)。この事件に端を発したイスラエルの対レバノン軍事行動は、その目的を当初の捕虜の救出からヒズブッラーの殲滅へとシフトさせ、開始から数日のうちに陸海空からの全面攻撃へと拡大した。一方、ヒズブッラーは、レバノン南部での地の利を活かしたゲリラ戦とイスラエル領内へのロケット攻撃で応戦し続けた。国連安保理決議第1701号による停戦が発効した8月14日までの34日間の激しい戦闘で、レバノンは死者1000名超、負傷者3500名超、実に国民の4人に1人が避難民となる未曾有の破壊にさらされ、一方、イスラエル側も154名の死者と約11億ドルともいわれる経済的損失を被った[末近2006a; 2006b]。

イスラエル軍の猛攻を耐え抜いたヒズブッラーは、9月22日、その健在ぶりをアピールすべく「勝利祭典 (Mihrajān al-Intiṣār)」と銘打った集会を開催した。この集会においてナスルッラーは戦争勃発以後初めて大衆の前に姿を現した。そして、約100万人の参加者(主催者発表)を前に約70分間熱弁をふるい、高らかにヒズブッラーの「大いなる歴史的、戦略的、神聖なる勝利」を宣言した。この演説が「勝利演説」である。

演説の内容は、テーマ別に見てみると、①イスラエルに対するヒズブッラーの勝利、②米国および親米アラブ諸国に対する批判、③レジスタンスによるレバノン領土・主権の回復の必要性、④レバノンにおける宗派主義の廃絶と国民統合の訴え、⑤シリアおよびイランとの関係の強調の5つに大きく分けられる。全体としては、レバノン国民、特にヒズブッラー支持者に対してねぎらいの言葉を送り、今後の政策方針を示す一方で、グローバルなメディア空間を意識した全世界向けのメッセージを通して国内外の敵対する政治勢力を牽制するようなものとなっている。

この演説は、現代のレバノン政治を考える上で、次の3つの観点から「歴史的演説」であったと評価できよう。第1は、ヒズブッラーが、この戦争および演説により1985年の公式誕生以来最大ともいえる広範な支持を、レバノンのみならずアラブ、イスラーム世界において獲得することになったと見られている点である。むしろ、ナスルッラーによる「勝利宣言」はヒズブッラー側の価値判断と政治的思惑にもとづいたものである。イスラエルとの全面戦争は、ヒズブッラーにとってその生存を脅かす危険な行為である。しかし、それは逆に、イスラエル軍が撤退しヒズブッラーの組織が存続するという「現状維持」を「勝利」へと昇華し読み替える絶好の契機ともなる。つまり、ヒ

* 立命館大学国際関係学部

ズブッラーは、いわば自作自演の戦争を通してレバノンのレジスタンスとして使命とアラブ・イスラーム世界におけるパレスチナ解放の大義（イスラエルへの直接攻撃）の両方を実践し、結果的にレバノンの国境を越える人気を高めることとなったのである。

第2は、レバノンにおいて、8月14日の停戦発効ではなくこの演説をもってレバノン包囲が完全終了したと広く認識されている点である。レバノンでは、2006年の終わりまでに戦況を詳しく綴ったルポが多数刊行されたが、そのほとんどが「勝利演説」のテキストでもって締めくくられている¹⁾。それらには、軍事的にはイスラエルに圧倒されたものの、あくまでも勝利したのはヒズブッラーおよびレジスタンスであり、ひいてはレバノンであるとする願望の投影があることは言うまでもない。しかし、レバノン人自身が紡いでいくレバノンの現代史を理解する上で、この演説の意味付けは見逃すべきではないだろう。

第3は、第2点目とやや矛盾するようであるが、この戦争および「勝利演説」をめぐる評価が、現在進行中の与野党の政治的対立を助長していると思われる点である。ヒズブッラーおよびその支持者たちは、2006年をイスラエル軍の進行を撃退した英雄的な年として位置づける。しかし、一方、現政権および与党支持者にとっては、シリアによる実効支配が終焉した年として、2005年が「レバノン国民のメモリアル」の対象として語られる。この2つの見方が同時に1人の国民に共有されるケースは稀である。レバノンにとって2005年と2006年のいずれを重んじるかという歴史認識の違いは、野党／与党、宗派の違い、親シリア／反シリアのあいだに横たわる現在進行形の政治的亀裂を深め、歴史観や世界観の断絶を助長する危険性が危惧される。これは、イスラエル軍のレバノン南部（通称「安全保障地帯」）からの無条件撤退が行われた2000年が、国民的な記念の年となっているのとは対照的である。

II. ナスルッラーとヒズブッラー

1. 幼年期から青年期

サイイド・ハサン・ナスルッラーは、1960年8月31日、レバノン南部スール近郊の村バーズリーヤで生まれた²⁾。青果商であった父のアブドゥル・カリーム・ナスルッラー（Abd al-Karīm Naṣr Allāh）のベイルート移住にともない、幼年期をベイルート東部郊外のカランティナー地区で過ごした。同地区は地方から移住したシーア派住民が密集する貧しい一帯であった。幼年期のナスルッラーは兄弟とともに家業を手伝い、やがて父アブドゥル・カリームは小さな食料品店を構えるまでになった。他の同年代の子供たちがサッカーに熱狂するのを横目に、ナスルッラーはムーサー・サドル（Mūsā al-Ṣadr）のイスラームの教えに熱中し宗教書を買いに出かけるという篤信的な子供であったようである。ベイルートでは、私立小学校キファーフと公立中学校で勉学に励んだ。

1975年にレバノン内戦が勃発すると、ナスルッラーは家族とともに故郷のバーズリーヤに避難し、その後スール（ティール）の公立学校で中等教育を終えた。バーズリーヤではムーサー・サドルのアマル運動（Ḥaraka Amal）のメンバーとなり、10代で村の支部の幹部に抜擢された³⁾。この時期には、スールのウラマーであったムハンマド・ガラウィー（Muḥammad al-Gharawī）のす

1) 例えば、[al-Saḡīr 2006; Bazzi 2006] が挙げられる。

2) 8月31日はムーサー・サドルが「お隠れ」（イタリアからリビアに渡航中に行方不明となり、現在もその消息は不明である。1978年のことである。）になった日と偶然一致する。そのため、熱狂的な支持者たちのなかには、ナスルッラーをサドルの生まれ変わりであると言う者もいる。

3) アマル運動の結成過程および思想・活動については、[Ajami 1986; Halawi 1992; Norton 1987] が詳しい。

すめで、イラクのナジャフへの留学も果たしている。ナスルッラーはガラウィーの紹介状を片手に、ムハンマド・バーキル・サドル (Muḥammad Bāqir al-Ṣadr) のハウザ (シーア派の宗教学校) の門を叩いた (ナジャフでのナスルッラーの世話人が、後のヒズブッラー書記長となるアッバース・ムーサウィー (‘Abbās al-Mūsawī) であった)。ナスルッラーが 16 歳の時であった。

1978 年、イラクのバアス党による国内のシーア派イスラーム勢力に対する弾圧が強まるなか、ナスルッラーは秘密裏にイラクを出国し、レバノンに戻った。そしてムーサウィーがバアルベックに設立したイマーム・モンタゼリー・ハウザでイスラーム学の勉強を続けた。その一方で、ナスルッラーはアマル運動の活動も再開し、1979 年にはバアルベック地区の政務担当者および運動の政治局のメンバーに任命されている [Manshūrāt al-Fajr 2006: 13-152; Sayyid Aḥmad 2006: 13-51; Shidyāq 2006: 7-16]。

2. ヒズブッラーへの参加

1982 年のイスラエル軍によるレバノン侵攻を受けて、ナスルッラーは武力によるレジスタンスの必要性を確信する。当時はレバノン内戦の最中であり、祖国防衛のための外交力・軍事力を担う政府が機能麻痺にあったこともその一因として指摘できよう。ナスルッラーは黎明期のヒズブッラーに参加し、軍事部門イスラミック・レジスタンスの結成にたずさわったという。1987 年にはヒズブッラーに新設された執行会議 (al-Majlis al-Tanfīdhī) の議長に任命され、また最高意思決定機関である諮問会議 (Majlis al-Shūrā) のメンバーとして、組織の政策立案にたずさわった。

ヒズブッラーの幹部としての活動の傍ら、ナスルッラーは 1980 年代を通して自らの学問的関心を強く抱き続けたようである。1985 年にベイルートに居を移すまで、バアルベックのハウザにてイスラーム学の勉強を続けた。1989 年にはイランのコムに留学したが、レバノン内戦終結に向けた情勢変化にともない、わずか 1 年で帰国している [Manshūrāt al-Fajr 2006: 13-152; Sayyid Aḥmad 2006: 13-51; Shidyāq 2006: 7-16]。

1992 年 2 月、当時のヒズブッラー書記長ムーサウィーがバアルベックにてイスラエル軍ヘリコプターの空対地ミサイルによって殺害されたことを受けて [Khatūn 2002]、諮問会議は全会一致でナスルッラーを次期書記長に選出した⁴⁾。当時は、レバノン国内での主要な戦闘が収束し、国家が徐々に秩序と統治機能を回復しつつある時期であった。そのため、ヒズブッラー指導部では、新たな政治環境に対応するための今後の組織のあり方について激論が交わされていた。前書記長は内戦の終結とともに穏健化路線を打ち出していたが、暗殺という実力行使への反動から、ヒズブッラー指導部は対イスラエル政策においてより強硬な姿勢を示していたナスルッラーを後継者に選出したのである [Suechika 2000: 278-282]⁵⁾。

しかし、新書記長としてのナスルッラーは、組織内の革命急進派による反対の声を押し切り、内戦後初めてとなる 1992 年の国民議会選挙に組織として正式参加することを決断した。イスラーム革命組織として誕生し、国民国家としてのレバノンの存在そのものに疑問を投げかけてきたヒズ

4) ヒズブッラーの書記長は、諮問会議のなかから同会議メンバーの投票により選出される。任期は 3 年。歴代書記長は、①スブヒー・トゥファイリー (Subhī al-Tufaylī, 1985-1990)、②アッバース・ムーサウィー (1990-1992)、③④⑤⑥ハサン・ナスルッラー (1992-、2007 年 3 月現在 4 期目)。

5) 1992 年当時、ヒズブッラー指導部には内戦後の政策めぐり主に 2 つの派閥が存在していたと言われる。穏健派の幹部として、アッバース・ムーサウィー、スブヒー・トゥファイリー、フサイン・ムーサウィー (Husayn al-Mūsawī) が挙げられ、政策的にはイランのハーシェミー・ラフサンジャーニー (Hashemī Rafsanjānī) 大統領の影響を受けていたとされる。他方、イランのアリー・アクバル・モフタシェミー (‘Alī Akbar Mohtashemī) に近いとされた強硬派として、ハサン・ナスルッラーとイブラヒーム・アミン (Ibrāhīm Amīn) が挙げられる [Suechika 2000: 278-282]。

ブッラーが、レバノン国家の政治システムのなかでの合法政党へと大きく変化した瞬間であった⁶⁾。

3. その政治手腕

しかし、このヒズブッラーの合法政党化は、それが革命組織としての理念を放棄したことを意味しない。1985年に発表された、組織の政治方針や思想を示した基本文書「公開書簡(al-Risāla al-Maftūha)」は、今日に至るまで一切修正が行われていない[Hizb Allāh 1985]⁷⁾。ヒズブッラー書記長としてのナスルッラーの類い稀な政治手腕は、一言で言えば理念と現実とのあいだのバランス感覚であろう。すなわち、理念に抵触しないかたちで現実的な政策決定を行い、個々の政策実践の成功が理念の正当性を強化するというものである。逆風を順風へと変えるナスルッラーの巧みな舵取りにより、ヒズブッラーは激動の内政そしてイスラエルとの闘争という荒波を乗り切ってきたのである[末近 2003; 2005]。

内政においては、レバノンを実効支配していたシリアに接近し、政党としての発言力を強めてきた。また、イスラーム国家の建設や革命よりも政権内部からの改革の強調、イデオロギーを異にする政治勢力との積極的連携、イスラームやアラブの連帯とともに国民国家としてのレバノンの称揚など、あくまでもイスラーム革命組織としての理念を否定しないかたちで具体的な政策を推進してきた。こうしたいわば現実路線に異を唱える者たちも組織内には数多く存在したものの、ナスルッラーはレバノン政府と協力することで組織内の強硬派の伸張を抑えてきた。その最も顕著な例が、1997～98年のトゥファイリー元書記長による「謀反」の鎮圧であろう[Suechika 2000: 281-282]。

このようなナスルッラー指導下のヒズブッラーの成功は、レバノン政治におけるその特殊な政治的位置づけに支えられている。内戦終結時にすべての民兵組織が武装解除を実施したが、ヒズブッラーはイスラエル占領軍に対するレジスタンスとしての役割から、法的に武器の保有継続を認められた。ナスルッラーは、レジスタンスの軍備を増強し、ロケットやミサイルによる越境攻撃、リモート技術による一撃離脱、「越境誘拐」、捕虜交換、パレスチナ占領地区におけるパレスチナ・レジスタンスの作戦との連動といった新たな戦術を次々に採用した。ナスルッラーの書記長就任以後、イスラエル兵の死者は急増し、その結果、1993年と1996年にイスラエル軍の大規模な対レバノン軍事行動を招いている。しかし、こうして「イスラエルの脅威」が再生産されることで、ヒズブッラーはレジスタンスとしての存在意義を刷新し、政治的な発言力を強めてきた。1997年にはレジスタンスを事実上全国民に開放し、以後「レバノンのレジスタンス」としての性格を強調してきた[al-Sarāyā al-Lubnāniya li-Muqāwama al-Ihtilāl al-Isrā'īlī 1999]。しばしばわき起こるヒズブッラーの武装解除をめぐる国内世論も、「イスラエルの脅威」の前にはかき消されがちとなる。

ハサン・ナスルッラーの名を一躍世界に知らしめることになったのが、2000年5月25日の「南部解放」、すなわち1978年以来レバノン南部を占領していたイスラエル軍の無条件撤退であった。この出来事は、中東最強の軍隊に対する民衆レジスタンスの勝利であるとレバノン国内外で受け取られ、ゲリラ戦術による解放闘争の有効性を証明することになった。また、2004年初頭にはイスラエル人捕虜1名と兵士3名の遺体と引き替えに、イスラエルにおける400名以上のアラブ人拘留者の解放・祖国帰還を実現させ、その確かな計画立案と巧みな交渉術に注目が集まった。一般に「南

6) レバノン政治における政党としてのヒズブッラーの意義については[末近 2002]を参照。

7) 「公開書簡」に示されるヒズブッラーの3大目標は、①レバノンからのイスラエル軍の撃退、②レバノンにおけるイスラーム国家建設、③レバノンにおける米・仏の影響力の排除であるが、これらはそれぞれイスラエル国家の破壊、世界大イスラーム国家の建設、世界中の非抑圧者たちの解放というレバノンを超えた究極的目標の一段階と位置づけられる。

部解放」はレバノンにおけるレジスタンスの存在意義を損なうものだと見なされていたが、捕虜交換に見られるような新たなアジェンダと戦術の設定により、破滅的な全面戦争を避けながらも対イスラエル闘争を継続することを可能にさせたのである。

4. 大衆政治家としてのナスルッラー

1997年、ナスルッラーは、レジスタンスに参加していた長男ハーディー (Hādī) をイスラエル軍および南レバノン軍との戦闘で失っている。その際、あくまでもヒズブッラーの指導者として、息子を特別扱いせず1人の殉教者として扱い、祝福したと伝えられる⁸⁾。しかし、このことは逆に、「殉教者の父親」としてイスラエル軍との戦乱で家屋や家族を失った支持者たちからの共感を生み、また、レジスタンスへの志願者が絶えないことにつながっている。

ナスルッラーは、これまでのところその思想を体系的に書物に綴ることはしていない⁹⁾。基本的には大衆演説を通して、その思想が披露される¹⁰⁾。彼の人気を支えているのは、上述のような戦略・戦術レベルの成功の積み重ねに加えて、明快で大衆を惹きつけるこの演説にある。これがときに稀代の名演説家ナセルになぞらえて「21世紀のナセル」と呼ばれる理由の1つであろう。

演説の内容は、アーシューラーのような宗教行事の際でも政治的なテーマが占める割合が高い。新たな政治方針や支持者へのメッセージとともに、米国とイスラエルに対する批判、パレスチナのためのアラブ／ムスリムの連帯といった「お決まり」の話題が取り上げられる。バスマラ¹¹⁾で静かに幕を開ける演説は、徐々に熱を帯びていき、終盤には雷のように言葉が次々とたたみ掛けられる。格調高いフスハー (正則アラビア語) を基本とするが、随所にレバノンのアーンミーヤ (方言) がちりばめられる。そして、いざ「お決まり」の話題になると、聴衆はナスルッラーの言葉に「合の手」を入れ、会場は一体となる。

また、ナスルッラーの演説は毎回ヒズブッラー系衛星チャンネル「マナール (al-Manār)」で中継され、全世界に発信される。また、演説のテキストや音声・映像のCD・DVDが直ちに制作され、配布・販売される。そのため、近年の演説は、メディア戦略を強く意識した内容、構成、演出 (舞台装置やカメラワークなど) になっていると思われる。一大イベントとなった演説集会の規模は年々巨大化しており、今日では最大で約100万人を動員すると伝えられる。今やナスルッラーの一挙手一投足は、レバノンのみならずアラブ世界、イスラーム世界に対しても大きな影響力を有している。

ナスルッラーの口から発せられる言葉について、独自の思想と組織としてのヒズブッラーの決定を区別することは難しい。しかし、いずれにしても、「有言実行」を貫いてきたナスルッラーの演説がヒズブッラーのイデオロギーと動向の両方を読み解くための重要な鍵であることは間違いないであろう。

8) ハーディーの殉教とそれをめぐる発言・論考については、[al-Wahda al-I'lāmīya al-Markaziya 1998] を参照。ナスルッラーは、妻ファーティマ・ヤースーン (Fāṭima Yāsīn) とのあいだにハーディーを含めて5人の子供をもうけている。

9) ナスルッラー自身の筆による書としては、[Naṣr Allāh 1410 A.H.] が挙げられる。

10) ナスルッラーの演説集としては、[Bazzi ed. 2004; al-Markaz al-Thaqāfi al-Lubnāni ed. 2006; Manshūrāt al-Fajr ed. 2006] が刊行されている。またイスラーム・レジスタンス (al-Muqāwama al-Islāmīya fi Lubnān) のホームページ (www.moqawama.org) においても、演説の音声およびテキストが入手できる (2007年3月8日現在)。

11) 「慈悲あまねく慈悲深きアッラーの御名によって」という句。クルアーンにおいて各章 (懺悔章を除く) の冒頭に示される句であり、全部で114回登場する。

Ⅲ. 訳出について

「勝利演説」は、バイルートの現地時間 2006 年 9 月 22 日午後 2 時から「マナール」を通して全世界に生中継された。訳出には、演説当日の夜にヒズブッラー系週刊誌「インティカード (*al-Intiqād*)」のウェブサイトに掲載されたテキストを使用した [al-Intiqād 2006]、適宜、マナールの出版局 (Dār al-Manār) からリリースされた DVD「アッラーの勝利：勝利祭典 2006 年 (Naṣr min Allāh: Mihrajān al-Intiṣār 2006)」を参照した [al-Jamʿīya al-Lubnāniya li-l-Fannūn 2006]。ナスルッラー演説特有の節回し、拍子、間の取り方、聴衆との掛け合いなどをできるだけ反映させるように心がけ、訳文の構成と表現を整えた。「インティカード」の演説テキストではナスルッラーの発言が一部省略されているが、それらの箇所については映像資料にもとづき訳文を追加した。なお、小見出しは、訳者が独自に付加したものである。

引用文献リスト

- 末近浩太 2002 「現代レバノンの宗派制度体制とイスラーム政党：ヒズブッラーの闘争と国会選挙」日本比較政治学会 (編) 『現代の宗教と政党：比較のなかのイスラーム』 (日本比較政治学会年報第 4 号) 早稲田大学出版部, pp.181-212.
- 2003 「レバノン・ヒズブッラーのジレンマ：対米・イスラエル強硬路線とイスラーム的言動」『季刊アラブ』 105: 10-13.
- 2005 「レバノン・ヒズブッラー：『南部解放』後の新戦略」『現代の中東』 38: 19-38.
- 2006a 「中東政治を左右する存在：『ヒズボッラー』とは何か」『外交フォーラム』 219: 14-16.
- 2006b 「レバノン包囲とヒズブッラー」『国際問題』 555: 50-58.
- 2006c 「『レバノン』をめぐる闘争：ナショナリズム、民主化、国際関係」『中東研究』 494: 56-67.
- Ajami, Fouad. 1986. *The Vanished Imam: Musa al-Sadr and the Shia of Lebanon*. London: I.B. Tauris.
- Bazzī, M. Ḥ. 2006. *al-Waʿd al-Ṣādiq: Yawmīyāt al-Ḥarb al-Sādīsa*. Beirut: Dār al-Amīr.
- Bazzī, M. Ḥ. ed. 2004, *Hākadhā Takallam Naṣr Allāh*, 2 vols. Beirut: Dār al-Amīr.
- Halaqi, Majed. 1992. *A Lebanon Defied: Musa al-Sadr and the Shi'a Community*. Boulder: Westview Press.
- Ḥizb Allāh. 1985. “al-Risāla al-Maftūḥa, allatī Wajjah Ḥizb Allāh ilā Mustadʿafīn fī Lubnān wa al-ʿĀlam Mubayyanān fī-hā Taṣawwrāt-hu wa Minhaj-hu”. Beirut: February 16.
- al-Intiqād* (www.alintiqad.com) 2006. “al-Naṣṣ al-Kāmil li-Kalima al-Amīn al-ʿĀmm li-Ḥizb Allāh Samāḥa al-Sayyid Ḥasan Naṣr Allāh fī Mihrajān al-Intiṣār al-Ilāhī alladhī Aqāma-hu Ḥizb Allāh fī al-Dāḥiyā al-Janūbiya li-Bayrūt,” September 22.
- al-Jamʿīya al-Lubnāniya li-l-Fannūn. 2006. “Naṣr min Allāh : Mihrajān al-Intiṣār 2006”. Beirut: Dār al-Manār (DVD).
- Khatūn, M. ʿA. 2002. *Amīr al-Qāfila: al-Sīra al-Dhātīya li-Sayyid Shuhadāʾ al-Muqāwama al-Islāmīya Samāḥa al-Sayyid ʿAbbās al-Mūsawī*. Beirut: Dār al-Walāʾ.
- Manshūrāt al-Fajr ed. 2006. *Mawsūʿa Naṣr Allāh: al-Rajul alladhī Yakhtaṣir Umma*, 4 vols. Beirut: Maktaba Manshūrāt al-Fajr.

- al-Markaz al-Thaqāfī al-Lubnānī. 2006. *Mawsū‘a al-Muqāwama al-Lubnānīya, Hizb Allāh bi-Qiyāda Samāha al-Sayyid Hasan Naṣr Allāh: Tārīkh al-Širā‘ al-Lubnānī al-Isrā‘īlī*, 11 vols. Beirut: al-Markaz al-Thaqāfī al-Lubnānī.
- Naṣr Allāh, S. H. 1410 A.H., *Durūs fī Khaṭṭ al-Imām*. Beirut: Jam‘īya al-Ma‘ārif al-Islāmīya al-Thaqāfīya.
- Norton, Augustus Richard 1987. *Amal and the Shi‘a: Struggle for the Soul of Lebanon*. Austin: Texas University Press.
- al-Safīr ed. 2006. *Yawmīyāt al-Ḥarb al-Isrā‘īlīya ‘alā Lubnān 2006*. Beirut: al-Markaz al-‘Arabī li-l-Ma‘lūmāt.
- al-Sarāyā al-Lubnānīya li-Muqāwama al-Iḥtilāl al-Isrā‘īlī. 1999. “al-Sarāyā al-Lubnānīya: Muqāwama Waṭan wa Irāda Sha‘b”. Beirut: March 14.
- Sayyid Aḥmad, R. 2006. *Hasan Naṣr Allāh: Thā‘ir min al-Janūb*. Cairo: Dār al-Kitāb al-‘Arabī.
- Shidyāq, ‘I. 2006. *al-Muqāwama wa Sayyid-hā Hasan Naṣr Allāh*. Beirut: al-Maktaba al-Hadītha.
- Suechika, K. 2000. “Rethinking Hizballah in Postwar Lebanon: Transformation of an Islamic Organisation,” 『日本中東学会年報』 15, pp. 259-314.
- al-Waḥda al-‘lāmīya al-Markazīya ed. 1998. *Sijill al-Nūr: Qanādīl...ilā al-Zaman al-Ākhar, Istishād al-Mujāhid Hadī Hasan Naṣr Allāh wa Akhaway-hi al-Mujāhidayn ‘Alī Muḥammad Kawtharānī wa Haytham Muḥammad Muḡhnīya, al-Waqā‘i‘ wa al-Shahādāt*. Beirut: al-Waḥda al-‘lāmīya al-Markazīya.

ハサン・ナスルッラー「勝利演説」

忌まわしき悪魔からのアッラーの御加護あれ。慈悲あまねく慈悲深きアッラーの御名において。世界の創造主であるアッラーに讃えあれ。我らが師、我らが預言者、最後の預言者であるムハンマドと、彼の誉れ高き一族と誇り高き教友たち、そしてすべての預言者と使徒に祝福と平安あれ。

最愛の人々よ、最高の人々よ。アッサラーム・アライクム。おお、最も誇り高き人々よ、最も純粹なる人々よ、最も高貴なる人々よ！

約束をお守り下さり、我ら、レバノン、そしてレバノンの人民に敵に対する勝利をお授け下さったアッラーに讃えあれ。我らに誇りと揺るぎない強さを授け、我らに御加護をお授け下さったアッラーに讃えあれ。我らが信頼し懺悔するお方であるアッラーに讃えあれ。お約束されたように、アッラーはいかなるときも超越者であり保護者である。アッラーの勝利、お助けとお力添えに讃えあれ。

兄弟姉妹たちよ。皆の者よ。9月22日、諸君らは今一度世界を驚愕させた。諸君らが偉大で誇り高く、誠実で勇敢な人々であることを見事に証明したのだ。ここ数日。ここ数日のあいだ、多くの人々がこの集会をめぐって心理戦を展開してきた。奴らがレジスタンス¹⁾に対する心理戦を行ったように。奴らは諸君らを恐怖させ、ここに近づけさせまいと、この広場を爆撃し、この演壇も破壊するなどと言った。しかし、9月22日、諸君らはこの勝利集会を飾ることで、7月12日から8月14日のあいだの諸君らよりもいっそう勇敢であることを証明したのだ。

こうして諸君らの前に立ち、諸君らの真中にいることは、お互いを危険にさらすことになろう。ほんの30分前までほかの選択肢がいくつもあった。私たちはこうすることの是非を議論していた。しかし私の心、理性、魂が、スクリーンを通して遠くの場所から諸君らに演説することを許さなかったのである。

人々は、敵が誤りを犯したり、犯罪に手を染めることを確信していた。しかしそもそもこの敵は我らが何者か知らなかったのだろうか？我らはかく語りきイマームの息子たちである。「我らが死に恐怖すると思うのか、異教徒たちよ。我らにとって死など何でもない。アッラーがお約束された殉教こそ、我らの尊厳の源なのだ。」

ようこそ皆の者よ。抵抗の南部、不屈のベカー高原、信義の北部、高潔の山地、ウルーバ²⁾のベイルート、名誉と尊厳のダーヒヤ³⁾の者たちよ。ようこそ皆の者よ。レバノンのパレスチナ難民キャンプの者たちよ。ようこそ皆の者よ。シリア、イラン、クウェート、バハレーンの者たちよ、そして勝利を祝福し喜びを分かち合うためにやってきた、すべての国の者たちよ！諸君らにアッラーの平安と慈悲、祝福があらんことを。殉教者とその家族に平安あれ。負傷者と血を流した者に平安あれ。囚われの者に平安あれ。諸君らの血と涙に平安あれ。孤児と未亡人に平安あれ。破壊された諸君らの家々に平安あれ。灰となった諸君らの財産に平安あれ。レバノンの山々よりも剛健な、その魂と意志に平安あれ！

1) ヒズブッラー軍事部門「イスラミック・レジスタンス」のこと。

2) アラビア語で「アラブ性」の意。アラビア語を母語とすること、またはそれにもとづいたアラブ人として意識。

3) 直訳すると「郊外」。ここではベイルート南部のシーア派が集住する地区を指す。ヒズブッラーの本部も同地区にある。

「大いなる歴史的、戦略的、神聖なる勝利」

兄弟姉妹たちよ。我らは、今日、大いなる戦略的、歴史的、神聖なる勝利を祝福している。誰が想像できたであろうか。いかにして諸君らたった数千のレバノンのレジスタンスが——できれば正確な数字を述べたいのだが——、制空権を握られた土地において、33日ものあいだ米英から空輸された精密誘導爆弾で武装した中東最強のイスラエル空軍に立ち向かうことができたのか。いかにして4万の将校と兵士、精鋭部隊の4個師団、予備役による3部隊に立ち向かうことができたのか。いかにして世界最強の戦車に対抗できたのか。いかにして中東最強の軍隊に立ち向かうことができたのか。いかにしてこのような厳しい状況のなかをわずか数千の人間が戦い抜いたのか。いかにしてその戦闘部隊がレバノン領海から敵海軍の戦艦を駆逐したのか。

さらに言えば、いかにしてその軍隊とレジスタンスが我が領海をシオニストによる汚染から防衛したのか。いかにして「イスラエル」の工業力の結晶であるメルカヴァ戦車を破壊し、昼夜の区別なく「イスラエル」のヘリコプターに損害を与え——私は誇張などしていない、「イスラエル」の報道を見てみよ——、精鋭部隊を諸君らにおびえるネズミの群れに変えたのか。想像できたであろうか。しかも人類の結束が尊ばれているにも関わらず、世界のみならずアラブまでもが諸君らを見捨て、諸君らをめぐって政治的分裂が起こったなかである。このムジャーヒディーン⁴⁾の部隊は、全能なるアッラーのお力添えとお助けがあってはじめてその軍勢を打ち破ることができたのだ！

この成功！世界に伝えるべきこのレジスタンスの成功は、道徳と精神のレベルにおける信仰、信念、アッラーへの服従、そして自己犠牲の覚悟によるものであろう。しかし同時に計画、組織、実行、軍備によるものでもあり、先に述べたようすべての考え得る防衛手順によるものなのだ。我らは漫然としたレジスタンスなどではない。我らは詭弁に満ちたレジスタンスなどではない。我らは土だけに執着して土地を忘れてしまうようなレジスタンスではない。我らは規律なきレジスタンスではない。敬虔で信仰心に篤く、高名で皆に愛されるレジスタンスである。それは高い気概、知性、訓練、装備、戦略を有するレジスタンスなのである。これこそが今日我らが祝福している勝利の秘訣なのである。

兄弟姉妹たちよ。この勝利は今日の諸君らのような勇気ある姿勢から生まれたのである。諸君らは、今日、極めて重要かつ重大な政治的および道徳的メッセージをレバノン人、アラブ人、そして世界中に発信するのだ。敵に、味方に。諸君らはレバノンの人民として7月12日から8月14日のあいだ不屈の抵抗を見せたことで、世界を驚愕させた。世界は我らの分裂と弱体化を確信していた。こうしたなかで諸君らは家を失い避難を余儀なくされたが、それでもなお抵抗し続けたのだ。8月14日が訪れたとき世界は確信した。たとえ避難先であっても、人々が状況を少しでも好転させようとレジスタンスを支え続けたことを知ったのだ。そのおかげでレジスタンスはいかなる状況においても屈することはなかったのである。

もう一度言おう。諸君らは避難民として車、トラック、そして自らの足で帰還を果たしたとき、世界を驚愕させたのだ。午前8時⁵⁾、ダーヒヤ、南部、ベカー高原は、顔を上げて帰還する力強く誉れ高き住民たちで埋め尽くされたのだ。今日、諸君らは世界を驚愕させ、数日前に「我々はレジスタンスの人气が低下しており、弱体化し始めたとのよい兆候をレバノンから得ている！」などと述べたアメリカに対して、こう知らしめているのだ。我らこそがレジスタンスの人民なのだ！こ

4) 「ジハードの戦士」の意。イスラーム・ゲリラを指す。

5) 2006年8月14日午前8時。国連安保理決議第1701号(2006年8月12日採択)による停戦が発効した時刻。

れこそがレジスタンスの人民なのだ！ アメリカ人に告げる。お前たちは、誤算にもとづく誤情報をよこす嘘つきの報告作成者たちを罵るがよい。

アメリカの戦争とレジスタンスの勝利

兄弟姉妹たちよ。我らは、今日、この戦争が決定、武器、計画、目的の観点からアメリカの戦争に他ならず、シオニストから1週間、2週間、3週間、4週間と期限を突きつけられたものであったことを強調したい。戦闘を終わらせたのは他ならぬシオニストたちの失敗である。最後の数日を思い出してみよ、最大数となる戦車が金曜、土曜、日曜日に破壊されたことを。最大数となる占領軍兵士が金曜、土曜、日曜日に死んだことを。最大数となるヘリコプターが金曜、土曜、日曜日に撃墜されたことを。

つまりシオニストたちは、もし戦争を継続すればそれが大難をもたらすことを悟ったのだ。アメリカ人たちが介入し、停戦決議案の承認すらしたではないか。奴らはレバノンのため、レバノンの子供たちのため、レバノンの女性たちの血のため、この美しいレバノンのために戦争を止めたのではない。奴らは「イスラエル」のためだけに戦争を止めたのだ。レバノンの我らに停戦を押しつけるために、奴らはやってきたのだ。我らの友人、アメリカ人たちが戦争を止めたのだ。

最初の数日間、アメリカ人の友人たちは停戦決議案を拒絶した。1週目にも拒絶した。2週目にも拒絶した。3週目にも拒絶した。そして4週目まで拒絶し続けたのだ！ 1ヶ月間にもわたり、彼らはレバノンの美しさが目に入らなかったというのか？ 彼らは最初から決めていたのだ。アメリカ側の説明はいくつもの外交経路にて用いられたが、その真の目的はヒズブッラーの殲滅であった。そしてヒズブッラーの殲滅の後には友好者、同盟者、それからレバノンにおける独立した真の国民主権とやらを追い求める者たちとの画策が始まるようしていたのだ。

戦争を止めたのは、全能なるアッラーのお力添えはもちろんのことであるが、諸君らレジスタンスの息子たちと、誉れ高く誇り高いこの勇敢な人民である。諸君らはどの国境線においてもレジスタンスを支援し、避難先のモスク、教会、修道院、学校においてでさえレジスタンスを支え続けたのである。戦争を止めたのは諸君らである！ 勝利を祝福するに値する者がいるとすれば、今まさにここにいる諸君こそがそれである。諸君らが勝利をもたらしたのだ！

我らはときに意見を異にし、また自問する。レバノンで起こったのは何だったのか、勝利であったのか、それとも敗北であったのか？ 私は意味論に深入りするつもりはないが、諸君らにこれだけは伝えたい。自身の選択、方針、計画、判断が勝利に値すると思う者は、誰でもそう述べればよいのだ。そして、自身が破れ倒れたと思う者は、誰でも敗北について述べるがよい。

我らは感じている、我らは勝利したと。レバノンは勝利した。パレスチナは勝利した。アラブ・ウンマは勝利した。そして、世界中のすべての抑圧され、侵害され、傷つけられ、苦しめられている者たちは勝利したのだ！

我らの勝利は党派の勝利ではない。2000年5月25日にビント・ジュバイルで私が述べたこと⁶⁾を繰り返したい。これは特定の党派や宗派の勝利ではない。これは特定のグループの勝利ではない。そうではなく真のレバノン、真のレバノン国民、そして世界中のすべての自由の人々の勝利なのであ

6) 2000年5月25日は、イスラエル軍が22年の占領を終え、レバノン南部から無条件撤退した日である。ヒズブッラーはこの日を「勝利の日」と定め、ナスルッラーは南部の町ビント・ジュバイルで演説を行った。そのテキストについては、[Bazzi ed. 2004] に収録のものを参照。

る。この大いなる歴史的勝利を歪めてはならない。これを党派、宗教、宗派、地域の缶に封じ込めてはならない。この勝利は人知を超えたものなのだ。月日だけがいずれその意味を明かすことだろう。

直接的な結果からすれば、次のように言っても過言ではない。諸君らのレジスタンスと不屈の抵抗が敵のすべての野望を打ち負かした。これは紛れもなく我らの勝利である。諸君らのレジスタンスと不屈の抵抗は、コンドリーザ・ライス⁷⁾が7月戦争⁸⁾によって誕生すると述べた「新しい中東」計画に致命的な打撃を与えたのだ。そんなものは失敗した。それが不条理の産物だからである！諸君らのレジスタンスと不屈の抵抗は、人権、自由、民主主義、尊厳を僭称するアメリカの欺瞞に満ちた政策を白日の下にさらしたのだ。諸君らの不屈の抵抗とレジスタンスは、アメリカへの敵対心を増幅し、アメリカをその敵対心にさらしたのだ。それはアラブ世界においてのみではない。また、イスラーム世界においてのみでもない。全世界においてである！

傍観するアラブ諸国

諸君らの不屈の抵抗とレジスタンスは、1人の人物を勇気づけた。私が偉大、偉大、偉大なアラブ人だと名指しすることができる人物であるチャヴェス⁹⁾が、昨日、国連で演説を行った。レバノンのレジスタンスは、今日、世界中の抵抗する人々、世界中の自由の人々、世界中の誇り高き人々、それから米国への屈辱的な従属を拒絶する世界中の人々を力づけているのだ。これこそが我らの勝利であり、これこそが我らの戦いの帰結なのだ。諸君らのレジスタンスは2000年の勝利においては解放のためのレジスタンスの範を示したが、2006年には不屈の抵抗の範を示したのだ。それは伝説となるに値する不屈の抵抗、そして奇跡に匹敵する不屈の抵抗である。これはすべてのアラブ人およびムスリム、すべての為政者、軍隊、人民にとっての揺るぎない範となるだろう。

昨日、アラブ諸国の外交団が安保理を訪れ、和平と解決を嘆願した。彼らに言いたい。私はあなたがたに対して「イスラエル」の破壊について話しているのではない。私はあなたがたが目指しているその和平と解決について話しているのだ。あなたがたはもはや戦いを放棄すると昼も夜も表明しているが、それでどうして誇りある解決が得られようか。あなたがたはレバノンやガザ、西岸地区のため、それからエルサレムのためにさえ戦いたくないのだ。あなたがたは石油禁輸措置を発動しないと日々表明しているが、それでどうして理にかなった解決が得られようか。実際、たとえばあなたがたの誰かが禁輸措置について述べたとしても、「そんなものは時代錯誤だ」と他の全員が反論するだろう！あなたがたは、戦い、ボイコット、禁輸措置の発動だけではなく、人々が路上で抗議行動をすることやパレスチナのレジスタンスが軍備を強化することさえ望んでいないのだ。あなたがたはパレスチナのレジスタンスを傍観し、資金援助を行わず、困窮させ、コンドリーザ・ライスのためだけに資金の流れを封じているのだ。どうしてこれらの諸国が「公平公正な解決」など保証することができようか？イスラエル人があなたがたのことを最優先に考えてくれるとでもいうのか？

あなたがたに言いたい。イスラエル人でさえも、今やレバノンのレジスタンスとその人民に大いなる尊敬のまなざしを送っている。もちろんこれらの卑しい者たちなどどうでもよい。あなたがたはアラブのイニシアティブのためにベイルートに集まり、レジスタンスのために立ち上がることと

7) コンドリーザ・ライス。アメリカ合衆国国務長官。2005年1月26日任命。

8) 2006年7月12日から8月14日にかけての戦争のこと。「7月戦争」以外には、「レバノン包囲」、「レバノン危機」、「第6次（中東）戦争」、「第4次（レバノン）戦争」などさまざまな呼び名が使われた。

9) ウゴ・チャヴェス。ベネズエラ大統領。1999年2月2日就任。

人員と軍備の増強を呼びかけた。しかし実際にはあなたがたは力の行使を拒んだ。仮に力を行使しなくとも、あなたがたは少なくともそれを用いて相手を牽制することぐらいはできただろう。我々が無力であるという見方は的外れである。

レバノンの人民は、世界中の人民に強さの証を示した。レバノンのレジスタンスは、すべてのアラブとイスラームの軍隊に強さの証を示した。アラブの軍隊とアラブの人民は、ガザ、西岸、東エルサレムのみを解放できるだけでなく、ささやかな決断といくばくかの覚悟があれば、川も海もすべてのパレスチナを奪還することができるのだ。しかし問題は、人間が自ら2つの選択のあいだで躊躇してしまい、人民と王冠のあいだの選択を迫られたあげく、王冠を選んでしまうことにある。また、エルサレムと王冠のあいだの選択を迫られたあげく、王冠を選んでしまう。祖国の尊厳と王冠のあいだの選択を迫られたあげく、王冠を選んでしまうのだ。レバノンのレジスタンスの強み、パレスチナのレジスタンスの強みは、彼らが人民の尊厳、聖地、自由を選択し、その指導者たち、息子たち、愛する者たちを犠牲にしてでも、全能なるアッラーの王冠に殉ずるところにある。

パレスチナ解放のための支援

今日、諸君らのレジスタンスは「イスラエル」のイメージを粉砕した。不信仰者の軍勢を駆逐したのだ。不信仰者の国家を震撼させたのだ。今このことを断言しよう。私は決して誇張したり、スローガンを叫んでいるのではない。占領下パレスチナで何が起きているのか、シオニストたちが何を話しているのか、「イスラエル」の将校たちと司令官たちとのあいだで何が起きているのか、諸君らは読み取ることができるだろう。

オルメルト¹⁰⁾は、今日、我らに抗議をしていることだろう、「なぜお前たちは勝利集会などを開催しているのか」と。『イエディオト・アハロノト』紙¹¹⁾が、今日、「イスラエル」の世論調査の結果を発表した。「イスラエルの首相にふさわしいのは誰か。」はたしてオルメルトはどれだけの得たのか。答えは7パーセントである。英雄的な国防大臣アミール・ペレツ¹²⁾にいたっては、たったの1パーセントだ！

この「イスラエル」は、政体が動揺し、軍部が震撼し、また、諜報において敗北を喫したことで、今日そのイメージを完全に変えたのだ。もはやいかなるアラブの為政者も政権も、「イスラエル」に対するさらなる妥協や屈辱的な状況に甘んじることなどできず、したがって我らのウンマを前にして『イスラエル』に対して我々ができることはできない。

いつの日だったか、時代と共に歩んできた博識な1人の老人がこう言った。「もし我々の1人1人がバケツ一杯の水を運び、占領下のパレスチナにまけば、『イスラエル』はこの世から消えるだろう。」そう、たった一杯の水である。確かに1千万、2千万、3千万の人々が立ち向かえば、「イスラエル」を打ち破ることができよう。しかしレバノンではわずか数千が「イスラエル」を打ち破ったのだ。したがってこの議論はここまでだ。我らは新たな段階、新たな時代へと突入せねばならない。すなわち、我らが自らを取り巻く状況を刷新する時代、それから尊厳、自由、主権、聖地を回復する奪還する時代である。

10) エフド・オルメルト。イスラエル首相。2006年5月4日就任。カディマ党首。

11) イスラエル最大発行部数を誇るヘブライ語日刊紙。『イエディオト・アハロノト』は、ヘブライ語で「最近のニュース」の意。

12) アミール・ペレツ。イスラエル国防大臣。2006年5月4日就任。労働党党首。

兄弟姉妹たちよ、この日、この神聖なる勝利の日においては、レバノンの内政についての話を期待する人々があり、もちろん私もその話をするつもりである。しかし内政についての話題に移る前に、7月12日同様に、私は次の2つの点を強調したい。まず、我らの心、感情、悲しみ、痛みは、今日パレスチナにある！それはガザ、ラーマッラー、ナーブルスにある。それはジェニーンにある。それはエルサレムにある。そして日々爆撃にさらされているあらゆるパレスチナの町、村、キャンプにあるのだ。

日々パレスチナの人々は殺戮され、パレスチナの家々は破壊されている。にもかかわらず、世界は沈黙している。いや、世界よりも先にアラブ世界が沈黙しているのだ。一体いつまでこの沈黙は続くというのか？ 一体いつまでこの屈辱的な傍観が続くのか？ パレスチナ人民を守るために、誰一人としてあなたたちの軍隊の出動を要請しないではないか。ただこの人民を支援するべく立ち上がるのではないか！ 道徳的、政治的、資金的、軍事的に支援しようではないか！ パレスチナでは、その地において神の奇跡を再現できる指導者、ウラマー、グループ、運動、若者、男たち、女たち、そして子供たちがいるではないか！

イラクへのメッセージ

レバノンについて語る前に、もう1つのメッセージを述べよう。それはイラクである。我らレバノン人はイラクを1つのモデルとして見るべきである。もしレバノンでの戦争が成功裏に終わっていたら、アメリカ人たちはレバノンにこのモデルを適用しようとしただろう。奴らはこのモデルをレバノンに適用したかったのだ。この戦争において、我らはレバノン人としてレジスタンス、軍、治安部隊、自衛団、赤十字、マスメディア、有力者、さまざまな党派、そして我らのすべての仲間から殉教者たちを送り出してきた。しかし、殉教者たちは何人いたのか？ 気にすることはない。1000人、いや、1200人か？ イラクでは、毎月約1万から1万5000人が殺されている。アメリカ人とモサドが仕掛け、資金を提供し、操作している破滅的な戦争においてである。我らレバノンにおけるレジスタンスは、レバノンを内戦の危機から守っているのだ。レバノンにおけるレジスタンスが内戦を引き起こそうとしていると言う者がいる。笑止！ もし「イスラエル」が勝利したのならば、レバノンは内戦へと追いやられ、諸君らは連邦制や分割、分離を求める声を聞くことになっただろう。つまり、「イスラエル」の思惑がレバノンを席卷することになるのである。

イラクは常に我らが気にとめておかねばならないモデルである。イラクの同胞への我らからのメッセージは、不屈、冷静、分別、継続であり、また内乱を避け、憎しみを退けることである。

強力で強固で公正なレバノン国家の建設

さて、ここでレバノンについて話そう。今日のレバノンにおける我らからのメッセージを述べよう。皆が結集するのだ！ この問題について誰も他人を排斥すべきではない。我らは皆信じている。我らの願い、我らの希望は、強固で、強力で、公正で、誇り高く、高潔な国家を築くことである。これこそが希望である。そしてこれはすべてのレバノン人が共有しなくてはならない問題なのである。

この場所から、殉教者たちの血に誓って宣言する。我らは宣言し、そして問題を提起したい。すなわち、レバノンの分離について話されるいかなる言葉もイスラエル人の言葉であり、レバノンの連邦制について話されるいかなる言葉もイスラエル人の言葉であり、レバノンの分割について話さ

れるいかなる言葉もイスラエル人の言葉である！我らレバノン人は、運命、決定、未来、神への祈りを同じくし、1つの国家において共に生きるのだ。我らは分離も解体も拒絶する。連邦制も分割も拒絶する。レバノンの統一を守るものは、強力で、強固で、公正な国家の建設である！シオニストたちの野望からレバノンの主権を守るものは、強力で、強固で、公正な国家である！レバノン人およびレバノンに住む者にとっての社会面および生活面での危機に対処できるのは、強力で、強固で、公正で、高潔で、誇り高き国家である！これこそが我らすべての望み願うことである。これこそ、我らすべてが望み願うことである！

強力で強固な国家とは、誇りを持って占領地を一寸残らず奪還することができる国家、ワッザーニー川¹³⁾ からリーターニー川¹⁴⁾ およびハースパーニー川¹⁵⁾ までの水を一滴残らず防衛することができる国家、日々主権を脅かす敵を食い止めることができる国家、そして、軍備、武力、理性、団結、組織、計画、そして祖国の意志によって真に守られていると、国民に確信させることができる国家である。涙では誰一人も守ることはできないのだ！¹⁶⁾

我らは、あらゆる国外勢力による介入および覇権を拒絶する、強力で、強固で、公正で、高潔で、独立した国家を熱望する。屈辱的な状況に甘んじることのない、誉れ高き誇り高き国家を望む。横領、浪費、不正の余地のない高潔な国家を望む。これこそ、我らが必要とする国家なのだ。

原因ではなく結果としてのレジスタンス

このレジスタンスの祭典において、諸君らに伝えたい。国家建設はレジスタンスの問題に取り組むためのごく自然な第一歩である。ここで我らは武器の問題と、この問題の解決を熱望している者たちについて触れておきたい。その者たちに告げる。結果に拘泥するではない。その原因に取り組もうではないか。私はスローガンではなく、論理にしたがっている。論理にもとづいて議論しようではないか。レジスタンスはいくつもの原因による結果である。すなわち、占領、拉致と拘留、水資源の搾取、レバノンに対する脅迫、そしてレバノンの主権に対する侵害である。これらがそもそもの原因である。原因に取り組めば、結果にも容易に取り組むことができよう。

我らが、レバノンとレバノン人を守ることができる強力で、強固で、公正な国家を築いたとき、レジスタンスとその武装についての問題に対する誉れある解決が容易に見いだされるだろう。レバノン人たちにしっかり聞いてほしい。私や私の兄弟たちは、しばしば興奮してさまざまなことを述べることもある。我らにいくばくかの責任を託した上で、話させてほしい。我らはこれらの武器が永遠に残るなどとは述べていない。これらの武器が永遠に残ることなど理にかなうものでない。言うまでもなく、それらはいつか終焉を迎えるのだ。ごく自然なる第一歩は、まず原因に取り組むことであり、そうすれば結果は終焉を迎えるのだ。強力で公正な国家を築こうではないか。それは、

13) ゴラン高原北部、ハースパーニー川の上流部分の呼称。レバノン南部からイスラエル軍が撤退した2000年以來、レバノン政府は試験的にポンプによる取水を進めている。これに対して、下流部分であるヨルダン川の水位低下を危惧するイスラエル側が強く抗議。2006年9月、レバノン軍は、国連レバノン暫定軍（UNIFIL）に対し、イスラエルがレバノン領内のワッザーニー川にパイプラインを通し、同国北部のユダヤ人入植地に水を供給しようとしていると通告している。

14) ベカー高原バルベックの西に水源地を有し、地中海岸の都市スールの北へと流れる全長約140キロメートルの川。レバノン南部最大の水源。

15) レバノン南部、ハースパイヤー近郊を水源地とする。南方へと流れ、ヘルモン山の麓を水源地とするバーニヤース川と合流した後、ヨルダン川となる。

16) 戦争中にベイルートで緊急に開かれたアラブ首脳会議において、8月7日、レバノンのフアード・スィニユーラ首相が他のアラブ諸国に対して涙ながらに支援を訴えたことを指すと思われる。

祖国と市民、それからその生活、水、誇りを守るものとなるのだ。レジスタンスの問題は、その解決に交渉テーブルすら必要としないことがお分かりだろう。この第一歩は、それよりもはるかに容易なものであるのだ。

しかし今何が起きているのか？ イスラエル人はシャブア農場¹⁷⁾を去るどころか、奴らは北方へと占領区を拡大しているではないか。「イスラエル」が国境確定の問題を解決するどころか、奴らはヒアーム¹⁸⁾やマルワーヒーン¹⁹⁾へと歩を進めているではないか。ワッザーニー川の水をめぐって我々が自分たちの法的権利を享受しているどころか、イスラエル人たちはワッザーニー川の水を収奪するためのパイプを敷設しているではないか。これが我らの祖国と資源を守る方法だというのか？

したがって、レジスタンスを武装解除するといういかなる主張、むろん一部の人間には「武装解除」が少し重たいかもしれないが、よろしい。それならばレジスタンスの武器を「返上」というのはどうだ。この国家、当局、政権の下、そして現在の状況下でレジスタンスの武器を返上するという主張は、「イスラエル」に対して無防備にレバノンをさらし続け、奴らが殺したいだけ殺し、拘留したいだけ拘留し、爆撃したいだけ爆撃し、我らの土地と水を収奪することを意味するのだ。これは明らかである。むろん、我らはそんなことを受け入れることはできぬ。そんなことを受け入れることはできぬ。

現時点でのレジスタンスの武装解除は不可能である

我らは1982年以来戦ってきた。レジスタンスのなかの有能な若者たちとその輝かしい戦果を、諸君らは知っているだろう。彼らは青少年時代をレジスタンスにおいて費やしているが、幸福で平穏な生活も、ましてや贅沢で安楽な生活を送ることはなかった。なかには24年、25年の月日をレジスタンスに費やした者もいる。「イスラエル」が我らの国土を占領し、我らの国土を蹂躪し、我らの安全を脅かし、我らの水と資源を収奪している限り、レジスタンスは終わることはないのだ。アッラーに誓って、決して終わることはないのだ！

これが唯一自明で論理的、合理的、そして祖国に対する責任ある選択である。ほかの選択肢もあるかもしれない。しかしすべてのレバノンの宗派と地域、そして数々の政治潮流と党派からこの大いなる祭典に集まったこのすばらしい面々を前にして、私は次のことを確認したい。圧力、脅迫、妨害によってレジスタンスを終焉させようとする挑戦は、敗北が約束された挑戦である。一部の者が企んでいるような、レジスタンスをレバノン軍と衝突させようとする挑戦は、敗北が約束された挑戦である。国軍とレジスタンスは、誰も引き離すことができない相思相愛の兄弟である！

「イスラエル」が仕掛けるものであろうがあるまいが、再び戦争によってレジスタンスの武装解除に挑む者——私は内部について述べている訳ではなく、外部あるいは内部について述べているのであるが、諸君らがとりたいたいようにとってよい——いずれにせよこの武装解除の挑戦の背後にいる者として、リヴニ²⁰⁾を取りあげたい。諸君らはリヴニを知っているか、よろしい。そしてペレツ

17) ゴラン高原の北端に位置する面積約25平方キロメートルのなかに大小14の農場を持つ地域の総称。その帰属をめぐって、レバノン、シリア、イスラエルの3国の間で争点となっている。ヒズブッラーおよびレバノン政府、シリア政府は、レバノン領であることを主張している。

18) ゴラン高原の北部、イスラエルとの国境付近にあるレバノン最南端の町の1つ。イスラエルによる占領が終結した2000年までは、イスラエル軍の捕虜収容所があった。

19) 内陸部、イスラエルとの国境付近にあるレバノン最南端の町の1つ。

20) ツィッピー・リヴニ。イスラエル外務大臣。2006年5月4日就任。カディマ党员。

だ。私はこの2人の人物、外相と国防相について話そう。元国防相であり戦略家のモーシェ・アレンス²¹⁾が同じようなことを述べていたが、この2人から聞こえてくる明確な一文に耳を傾けてみようではないか。奴らは言った。「我々はヒズブラーの完全破壊を望んでいた。しかし、そのような組織を破壊できる軍隊など世界中探しても存在しないことを悟った。」

奴らに告ぐ。世界のいかなる軍隊も、我らに武器を手放さすことなど強制できない。我らの手から武器を取り上げることはできないのだ。できないのだ！この気高く勇敢な人々がレジスタンスを信じている限り、何人たりともそんなことはできないのだ。私は武力でもって脅迫しているのではない。私はレジスタンスを愛するこの人々に託しているのだ。私はがれきの上に立つ、威風堂々とした老女に託しているのだ。彼女はこう言った。「ペイルートの私の家は破壊され、南部の家も破壊されました。しかし、私たちはレジスタンスとレジスタンスの武器と共にあります。」また他の人々はこう言った。「もしハサン師が武器を手放したら、彼は裏切り者となるでしょう。」彼らに告げたい。私は諸君らに誓う。勇敢で、忠実で、偉大なる人々よ。私は背信などで自分の人生を終わらせるつもりはない。殉教のために人生を捧げるのだ！

このような挑戦は、いずれも敗北が約束されているのだ。なぜならば占領、屈辱、退廃、専制、凋落を拒絶し、祖国のために自らと愛する息子たちを捧げる覚悟のある人民とレジスタンスがレバノンには存在するからである。そう、その通り。誇張ではなく、今日のレバノンはもはや単なる中東の一地域ではない。諸君らに支えられた強大な力である。レバノンのことを真摯に受け止めよ。西洋は真摯に受け止めよ。「イスラエル」は真摯に受け止めよ。世界中の傷つけられ抑圧された者たちが、敬意、期待、憧れ、誇りをもってレバノンをまなざしているのだ。

「我らは武器を永遠に保持することなど望んでいない」

このレジスタンスの問題については、誰もこれ以上不安を抱かないように、次の言葉でもって締めくくりたい。我らは武器を永遠に保持することなど望んでいない。過去25年間そうしてきたことを、私は今一度確認しておきたい。これらの武器は内政のためのものではない。これらは内政のために使われたことはないし、これからも内政のために使われることはない。これはシーア派の武器ではない。これはレバノンの武器である。この武器はスンナ派、ドルーズ派、シーア派の武器ではない。この武器はすべてのレバノン人のための武器である！これはレバノンの防衛、レバノンの主権、レバノンの独立のための武器である。諸君らに誓う。この武器の持つ性格と意義はこれからもそのままである。これはアッラーへの誓い、ウンマへの誓い、殉教者への誓いである。

当然の帰結として、まずは公正で、強力で、不屈で、誇り高く、美しく、堂々たる国家を築こうではないか。もしこの目標が大きすぎるならば、理屈を並べることだけに終始しないように、具体的な問題に直接向かおうではないか。今日、我らは「試験に失敗した者は誰もが失敗したのであり、成功した者は誰もが成功した」などと言うことはない。このように言うことはない。そうではなく、私はこう述べる。「皆が結集せよ。我らがいかに異なり、お互いが対抗しようとも、精神と政治のレベルにおいて我らのあいだに横たわる諸問題は厳しいものがある。我らは今レバノンにおいて深刻な難局にある。」誰一人として、自分たちが多数派であり、何も問題はなく、すべてが順調で、国は健全で、すべてがうまくいっているなどと言うことはできない。こんな認識は決して正しくないのだ！

21) モーシェ・アレンス。イスラエルの政治家。3度国防大臣の他に、駐米大使や外務大臣も務めた。リクード党員。

挙国一致内閣の発足

今日、特に戦後においてレバノンには深刻な危機にある。激しい国民的分裂が存在しているのだ。それは宗派的分裂ではない。今存在しているのは、シーア派とスンナ派のあいだの対立でも、ムスリムとキリスト教徒のあいだの対立でも、ましてやドルーズ派、スンナ派、シーア派とキリスト教徒との対立でもない。存在するのは国民的な政治的分裂である。存在するのは重要な戦略的および政治的判断の数々であり、シーア派、スンナ派、ドルーズ派、キリスト教徒のなかの特定の政治勢力が賛成し、同じ宗派のなかの他の政治勢力が反対しているだけのことだ。一部のシーア派がヒズブッラーとアマル運動と異なる意見を表明したとき、彼らは我らが心を痛めると考えた。しかし我らは他の人々が異なる立場を表明することを心より歓迎する。このことは、現在の対立が宗派的なものではなく、あくまでも政治的なものであることを証明している！

ある誤解を取りあげてみよう。すなわち、もし仮に我らに損害を与えようとしても、それは我らに益することになるのだ。問題は我らが国民的分裂に直面していることなのだ。すべての宗派と地域から訪れたレバノン人によって実現したこの勝利祭典において今私が伝えたいこと、それを警告を込めて述べることにしたい。政治的分裂を宗教的あるいは宗派的分裂に転じようとする者たちを誰一人として許してはならない。政治的判断を貫くために宗教や宗派を操作することは許されないのだ。これは火遊びである。国を破壊するものである。国を破滅へと追いやるものである。なるほど、我らは政治的判断によって分裂している。我らは競争し、論争し、意見を異にする。我らはマスメディアにおいて互いを攻撃しあう。我らは路上に繰り出し、また、選挙を戦う。しかしこれらのすべてが平和的で民主的なメカニズムであり、合法的で許可されたものなのである。これが我らの強調したいことである。

したがって、政治的分裂と深刻な危機が存在する限り——これらについてはすぐ後に再び触れたいと思うが——、これらの危機への対処が不十分であることから、現在レバノンを統治しているグループが権力の座に居座り続けてはならないのだ。ならないのだ！ その解決のためのごく自然な第一歩は、挙国一致内閣の発足である。ここで私が挙国一致内閣について話すとき、それは誰かを失脚させたり、罷免したり、追放したりすることを意味しない。そうではなく私がかつて5月25日に述べたように²²⁾、レバノンを守備し、レバノンを防衛し、レバノンを築き上げ、レバノンを繁栄させ、レバノンを統一するために皆が歩み寄り支え合おうではないか。率直に言って、現政権はレバノンを防衛し、レバノンを再建し、レバノンを統一することはできない。しかし我らが現政権について物申すとき、それは決して誰かを追放し、罷免し、失脚させることを意味しない。我らは呼びかける。皆が結集せよ、そして守備し、再建し、防衛しようではないか！

つまり、強力で、公正で、強固な国家の建設は、何よりも真剣な挙国一致内閣の発足によって開始されるのだ。私はここでスローガンを掲げているのではない。彼らに聞いて欲しい。私はここで口先だけのスローガンを掲げたり、時間稼ぎをしたり、同盟者や友好者たちにおもねっているのではない。これは我らの真摯なる計画であり、我らは来たる次の段階においてその実現に向けて全力を尽くしたい。

公正で、強固で、強力な国家の建設のための第2の提案は、すべての宗派と政治潮流が真の代表を送り出すことができる現実的な機会を保証し、また、他の宗派に従属する宗派がなくなるような、公正な選挙法の起草である。これが公正で、強力で、強固な国家を建設する方法である。これが我らのすべての問題の解決への糸口なのである。

22) 2000年5月25日を指す。

2万発以上のロケット

ここで残りの問題と困難について簡単に述べることにしたい。まず、レジスタンスの問題である。今し方述べたように、昨今の情勢と関係するいくつかの問題がある。彼らは海上封鎖にやってきたが、一体何のためなのか？ レバノンを保護するためか？ 否！ ドイツの首相²³⁾——彼女にアッラーの平安がありますように——、彼女は言った。「ドイツ海軍はイスラエルの生存権を守るという歴史的な役割を担った」——私はいくぶんこの見解が気に入ったので、また後で触れたいとも思う——。彼らは海上からやってきたが、実は領空と国境をも封鎖したいのだ。彼らに告げる。国境、領海、領空を封鎖するがよい。しかしそんなことをしても、レジスタンスの意志とレジスタンスの武器が微塵も損なわれることはない！ 我らは33日ものあいだ戦争を戦い抜いたのである。これは誇張ではない。我らは長期の戦争に備えてきたのだ。先の戦争で費やしたのは、ほんのわずかな資源にすぎない。私はビント・ジュバイルで、我らが1万2000発のロケットを保有していると述べた。無能な連中はその1万2000発をもとに計算したのだ。その後我らは1万2000発が1万3000発を意味しないことを明らかにした。もしかしたらそれ以上あるかもしれない。海、空、砂漠、国境の封鎖を目論むすべての連中と敵に対し、今日ここに告げる。今日レジスタンスは、それ以上——「以上」という言葉を強調していることに注目せよ——、2万発以上のロケットを保有している！

厳しい戦闘が終結してからわずか数日のあいだで、レジスタンスは人員、組織、軍備を完全に回復した！ 今日のレジスタンスは7月12日前夜よりも強力である。なぜならば、戦争を通して新たな経験、新たな覚悟、新たな方針を得たからである。レジスタンスの弱体化を主張する者たちに対して、今一度告げよう。お前たちは誤算している。この日、2006年9月22日、レジスタンスは1982年以来で最強となった！ レジスタンスとその能力および武器について完全に回復したことを宣言する。

捕虜交換

第2の問題は囚われの者たちである²⁴⁾。諸君らの家族や子供たちは必ず戻ってくる。全員が必ず戻ってくるのだ！ レジスタンスの名にかけて、私は7月12日にこれを約束した。アッラーの人々の名にかけて、私の名でもなく私の父の名でもなくレジスタンスの人々の名にかけて、たとえ全世界がかかってこようと、間接交渉と交換取引を通して以外この2人の捕虜²⁵⁾を救い出すことはできない！ 7月12日の後、全世界が働きかけてきたが、諸君らは耐え抜き、その結果、捕虜は我らの手中にとどまった。我らが解放と帰還を要求している囚われの者たちの帰還なしに、2人は決して解放されることはないのだ！ アッラーのお望みのままに。世界にはこのことを確信してもらいたい。

シャブア農場とカファール・シューバー丘陵地の解放

第3にシャブア農場とカファール・シューバー丘陵地²⁶⁾の問題である。見事な抵抗を見せたこ

23) アンゲラ・メルケル。ドイツ連邦首相。2005年11月22日就任。

24) 政治犯としてイスラエル国内で拘留・収監されているヒズブラー・メンバー、レバノン人、およびその他のアラブ人のこと。

25) 2006年7月12日に、イスラミック・レジスタンスがイスラエルとの国境地帯で拉致した2名の兵士を指す。

26) シャブア農場に隣接する丘陵地。イスラエル軍の管理下にある。

これらの地域からやって来た人々は、国境地帯における新たな協定の行方をずっと心配していることだろう。私はシャブア農場とカファール・シューバー丘陵地を決して放棄しないことを約束する。占領されたレバノン領土の一寸たりとも放棄することはない。断じてないのだ！

実は、先の戦争と政治交渉のあいだ、シャブア農場解放のための好機があった。アメリカ人たちも合意寸前であった。いや、奴らは実際に合意したのだ。しかし奴らは約束を反故にし、こう言い放った。「我々は今シャブア農場をレバノンに返還することはできない。」なぜか？ ヒズブッラーにみすみす勝利を与えたくないからである。奴らに告げる。お前たちが返還したい奴に農場を返還してやれ。お前たちが与えたい奴に勝利を与えればよい。しかし農場を返還せよ。返還するのだ！

もし真摯な政治的意志、政治的統一、そして統合された政治的レジスタンスがあったならば、我々は戦争中にシャブア農場とカファール・シューバー丘陵地を奪還できたであろう。しかし私は諸君らに対し、それらが解放に向けての道を再び歩み始めたことを強調したい。現在進行中のすべての侵犯行為はやがて終焉を迎えるだろう。

レバノン軍の任務：祖国防衛

国家は今ここにある。我らの国軍、レバノン軍は今ここにある。UNIFIL²⁷⁾は5000人に増派した。過去にレジスタンスが国境にいたときは、何人たりとも入ってくることはなかった。たった10メートルのブルドーザーによる前進も迎撃され、後退を余儀なくされたからである。しかし今では我らの国境は開放されたままであり、そのため奴らはどこかまわらず入ってくる。起こるべきことが起こってしまったのだが、そうだとすればこれから先はどうなるというのだ？ この問題をレバノン軍だけに結びつけて考えるべきではない。レバノン軍は勇気、意思、覚悟を備えている。そしてその将校と兵士たちは、レジスタンスの人々の兄弟なのだ。両者のあいだに何ら違いはない。

この問題は政治的決定に絡んだものである。レバノン政府は、国軍を我らの不平を数え奴らの侵犯を記録するだけの集団に変えようとしているのか？ これはレバノン軍にとっては屈辱となろう。軍もレバノン人民もそんなことを容認しない。我が軍は、かつて1978年に国連部隊が行ったようにただ国境線に駐屯し、「イスラエル」による侵犯をただ数えるだけのものではない。現政権の決定にしたがって南部に展開した我が軍の任務は、祖国を防衛し、国民とその生活および安全を守ることである。祖国の主権と領土は今まさに侵犯されており、市民たちは拉致の危険にさらされ、彼らとその農地が攻撃されているのだ。これが政府の政治的決定だということか？

これまでのところ我らは耐え続けている。安保理決議第1701号²⁸⁾に対するいかなる違反も犯したくないからである。むろん決議は絶対神聖なるものではない。しかしたとえ合法的な防衛として行ったとしても、少しでもそれを違反することになったならば、ただちに非難の声が上がるのが現実である。「イスラエル」は常に数々の違反、侵犯、違法行為を常に行ってきたが、世界は沈黙したままである。

27) 国連レバノン暫定軍。United Nations Interim Force in Lebanon の略。国連安保理決議第425号(1978年3月19日採択)にもとづき、国連が編成・派遣している部隊。レバノンからのイスラエル軍の撤退を監視し、レバノン政府による領土の統治の安定化を目的とする。2006年の「レバノン包囲」の後、大幅に増派された。

28) 2006年8月12日採択。停戦決議の要点は、戦闘の全面停止(ただし、イスラエルの自衛的反撃は容認)、戦闘停止後に増強したUNIFILとレバノン国軍を南部全域に展開、これらの軍の展開と同時に並行的にイスラエル軍全軍がレバノン領内から撤退、イスラエルとレバノン両国による恒久停戦と長期的解決に向けての努力(ブルーライン(国連が定めた両国の境界線)の尊重、ブルーラインとリーターニー川のあいだの軍事緩衝地帯設置、国連安保理決議第1559号の履行)。決議のテキストは国連のウェブサイトで入手できる。(http://daccessdds.un.org/doc/UNDOC/GEN/N06/465/03/PDF/N0646503.pdf?OpenElement)

しかし我らが永遠に我慢すると思ったら大間違いである。よく聞くのだ。もし国家と政府が領土と国民を守るという責任を果たすことができないのであれば、1982年以來ずっとそうしてきたように、レバノン人民自らがその責任を引き受けることになるだろう！ シオニストたちに告げる。もし何者かがお前たちに安全を保障したとしても、そんなことは私の関知するところではない。もし何者かがお前たちにテーブルの下あるいは上から安全を保障したとしても、それはその者の頭を悩ますことになっても、レバノンにおけるレジスタンスやレバノン人民を悩ますことにはならないのだ！

次に我らに求められていることは、国民の意志を研ぎ澄まし、国軍を支援することである。そして我らの祖国——村、町、農地、教会、モスクのすべてを防衛するために、国軍に最高の装備を施すことである。

UNIFIL の任務：レバノン軍の支援

次は UNIFIL についてである。UNIFIL は強化された UNIFIL と言うべきものよりもいっそう強力に変貌したが、彼らに告げよう。我らは諸君らを歓迎するが、明確な任務の枠組みのなかにおいてのみ歓迎の意を示す。諸君らの任務はレバノン軍の支援である。ヒズブラーを諜報することでも、レジスタンスを武装解除することでもない。これは国連の事務総長コフィ・アナンと複数の高官が述べたことである。しかし私は、UNIFIL に参加している国がレバノンやレバノン人を守るために息子たちと兵士たちを送ったなどと言っているのを聞いたことがない。彼らは我ら兄弟姉妹に対して戸惑っている。彼らは我らを守るためにやってきたと述べることに戸惑っている。ところが彼らは「イスラエル」を防衛することについては明言しているのだ。

UNIFIL の部隊については、その任務に忠実である限りにおいて歓迎である。私はレバノンの UNIFIL 部隊の司令部に警告する。国際部隊をレジスタンスと衝突させようと企む者がいるとの情報を得ているためである。また、複数の会合において国際部隊の展開がレバノン内のパワーバランスを回復するなど議論されていることを耳にしているためである。これは重大な問題である。国際部隊は特定任務のためにやってきたのだから、レバノン内政に介入したり、そうした類の事柄に関与すべきではない。

最後の点を述べる前に、政治抗争について述べておきたい。我らは誰かとの政治抗争に没頭することを望んだのではない。戦争中には有害な議論をたびたび耳にしたが、我らは沈黙を守り、耐え抜いた。レジスタンスと我らに対する政治および報道を通じた誹謗、中傷、攻撃は、戦争が終わってからも続いた。しかし最近耳にするいくつかの発言のなかには、もはや見過ごせない事柄もある。全能なるアッラーは、信徒に対して広い視野、忍耐、そして寛大な心をお望みである。しかし同時にアッラーは信徒の醜行をお許しにならない。戦争中においてはじっと我慢していたものの、戦後のレバノンにおけるレジスタンスに対する報道と政治を通じた攻撃は、預言者以外誰も大目に見ることができないような限界に達している。私の兄弟たち、そして私も預言者ではないのだ！

シリアおよびイランとの関係とレジスタンス

我らは、もし1人が立ち上がり何かを言ったのであれば、それを理解することができる。2人でも理解できる。もし3人であっても、我らはそれを把握することができよう。すべての政治勢力が

ブリストル²⁹⁾に集まり、会合を開いた。自分たちの代表者、指導者、政治局のメンバーを引き連れてきて、自らの勢力の大きさを誇示しようとした。そして彼らはレバノン人に対して、レバノンで起こった先の戦争がイランの核問題のためのイラン人の戦争、あるいは国際法廷³⁰⁾の設置を妨害するためのシリア人の戦争であるとする文書を発表したのである。

そのような文書を容認することはできない。確かに——この勝利の日において繰り返したい——我らはハーメネイー師³¹⁾を指導者とするイラン・イスラーム共和国との友好関係を誇りとしている。また我らはシリア——その指導部および人民——との関係を誇りとしている。その通り。バッシェール・アサド大統領³²⁾を指導者とする指導部および人民である。我らは主権者である。我らは独立者である。先の戦争についてのそのような指摘が的外れであることは、イランやシリアの歴史よりも我らの歴史が証明している。我らの歴史が証明しているのだ！

しかしこの戦争については、アメリカと「イスラエル」が引き起こしたものであり、コンドリーザ・ライスが「新しい中東」のための産みの苦しみであると述べ、オルメルトやペレツらがさまざまなことを言い、その結果が我らの家々が破壊され、子供たちや女たちが殺戮されたものであり——それでも我々は戦い抜いたが——、アラブ人たちが「第6次戦争」と呼んだものであり、また、シオニストたちが「イスラエル」史上初だと評したものである。それをイランの核問題と国際法廷のために仕掛けられたものなどと言うことは、侮辱的な誤りである。まったくの誤りである。

私自身と私のターバンと髭を慕ってくれるすべての人々、そして私にそんな対立に加わらないように言ってくれた人々に敬意を表したい。党の若者たちと指導部は対立に加わることもできようが、私には限界がある。私と私のターバンと髭が、このレジスタンス、この人々よりも誇り高いなどということはない！もし私のターバンと髭に誇りがあるというならば、それは諸君らとレジスタンス、そして殉教者たちの血によって与えられたものである！

私は訴える。これらの対立を止めることを訴える。愚かで有害で粗暴な言い回しを控えることを訴える。我らは論理的で合理的な政治競争の枠組みの内にとどまらなくてはならない。なぜならば、我らは運命を共にしており、いつの日か共にレバノンを築き上げなくてはならないからである。しかし、私、ハサン・ナスルッラーは沈黙しない。レジスタンスの人々に対する侮辱に対して沈黙することなどないのだ！

数日前、「3月14日勢力」³³⁾の有力者の1人³⁴⁾が言った——一部の人は、なぜ私がこんなことを言うべきなのか問うかもしれない。よろしい、答えよう——。レジスタンスの人々が愚かだなどと、何人たりとも、たとえ小声であっても言うことは許されない。諸君らは愚かか？ 諸君らは愚かなのか？ 誰がこんな屈辱を受け入れられるというのだ？ 否、否、否！ 私はこの人々に敬意を表す。私はこの人々に敬意を表す。この人々、若者たち、女性たちに敬意を表す。私はその人が祖国を愛している限り、そのいかなる判断にも敬意を表したい。しかしレジスタンスの人々に対する

29) ペイルートのハマラー地区にあるル・ブリストル・ホテルのこと。与党勢力がしばしば会合に利用する。

30) 2005年2月14日に起きたラフィーク・ハリリー元レバノン首相の暗殺事件をめぐる国際法廷。シリアの事件への関与が疑われているため、その設置の是非は親シリア派と反シリア派に分裂しているレバノン政治の最大の争点の1つとなっている。

31) イラン・イスラーム共和国最高指導者。1989年の初代最高指導者ルーホッラー・ホメイニー師の死去を受けて、後継者に選出。

32) シリア・アラブ共和国大統領。2000年7月17日就任。

33) 現与党連合の通称。カターイブ改革運動、クルナト・シャフワーン会合、進歩社会主義党、ムスタクバル潮流、レバノン軍団などから構成され、反シリアの姿勢を打ち出している。その名称は、ラフィーク・ハリリー元レバノン首相の暗殺からちょうど1ヶ月後の2006年3月14日に結成されたことに由来する。

34) 進歩社会主義党党首ワリード・ジュンブラートを指すと思われる。

侮辱は、いかなるものも断じて許さない。その男は謝罪しなくてはならない。そう、謝罪しなくてはならないのだ！我らは全体主義の政党ではない。全体主義の体制でもない。全体主義の一派でもない。私の父は「ベク」³⁵⁾などではなかった。祖父も「ベク」などではなかった。同様に、私の息子も「ベク」などにはならないのだ！

我らはいかなる政治抗争も望んでいない。対話のかたちを通してこの国が政治的分裂から脱することを強く望んでいるのだ。そう、我らは国家の目標、国家の政策、国家の建設、国家の発展に寄与する者である。しかし我らは尊厳を持つ者である。我らの尊厳は何物にも代え難いものである。我らは家を建てることと引き替えに尊厳を浪費する者を誰一人として許さない。家々は我らの尊厳の代わりに破壊されたのだ。尊厳の代わりに破壊されたのだ！尊厳を犠牲にして飢えを癒すことができるなど、誰が想像できようか。我らは尊厳のために血を犠牲にしたのだ。これこそが我らのあり方である。それ以外どのようにあることができようか。これこそが、レバノンにおける我らにとっての物事のあり方なのだ。

平静と冷静への回帰を求める

これまで述べたことから、私は皆に平静と冷静への回帰を求めたい。我らは祝福すべきラマダーン月を間近に控えている。アッラーがすべてのレバノン人たちに幸福な時をお戻しにならんことを。全能なるアッラーが我らに今月の成功を授けることを祈り、そのために我らはアッラーのために断食し礼拝する。私は祝福すべきラマダーン月が物事を深く静かに考え、自分自身と現実を見直す機会になることを願っている。眼を開き真実を直視し、物事を不分明なままにするではない。誤算にもとづいたまま物事を積み重ねるではない。

兄弟姉妹たちよ、私は、今一度、レバノン人の殉教者、慎み深い殉教者の家族たち、負傷者、拘留者、そしてレジスタンスを愛し支持するすべての宗派、潮流、地域に感謝したい。私は世界中のアラブ人民とムスリムに感謝したい。私はすべての人々、そしてすべてのグループと政党に感謝したい。リストが長くなり、私が覚えている人々よりも忘れてしまう人々の方が多くなりかねないので、名前を挙げることは控えさせてもらおうが、それが一番よいだろう。

すべての人々に感謝する。戦争中に述べたように、アッラーが諸君らに勝利を約束して下さり、アッラーが諸君らの勝利を授けたのだ。アッラーが諸君らをお助けになること約束して下さり、実際にアッラーはお助け下さった。アッラーは諸君らをお守りになることを約束し、実際にアッラーはそれをお守り下さった。2000年5月25日ビント・ジュバイルと同じように締めくくろう。おお、レバノンの人民よ、おお、パレスチナの人民よ、おお、我らがアラブ・ウンマの人民よ。2000年5月25日に勝利の時代が始まり、敗北の時代は終わりを告げたのだ。もはや絶対に敗北はない。諸君らに幸福があらんことを。すばらしいラマダーンがあらんことを。諸戦略的で歴史的な勝利と幸福があらんことを。最も誇り高き人々よ、最も高貴なる人々よ、最も純粋なる人々よ。アッサラーム・アライクム！

35) オスマン帝国時代に使われた、主に軍事指導者や封建領主の称号。レバノンのドルーズ派名望家ワリード・ジュンブラートにしばしば「ベク」がつけられることから、彼を指しているのだと思われる。